

# 平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ニシン

学名 *Clupea pallasii*

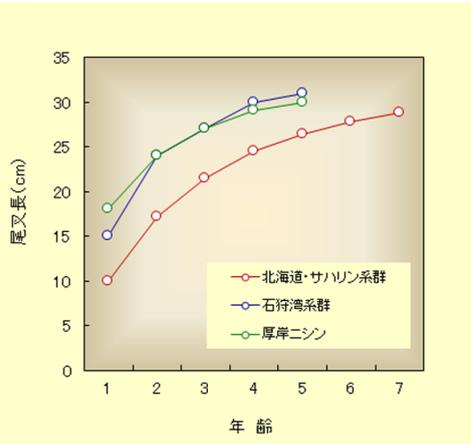
系群名 北海道

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 10～18歳（北海道・サハリン系群）、6～7歳（石狩湾系群や各地の湖沼性ニシンといった地域性ニシン）  
成熟開始年齢： 4歳で50%（北海道・サハリン系群）、2歳で100%（地域性ニシン）  
産卵期・産卵場： 4～5月（北海道・サハリン系群）、5～6月（テルペニア系群）、1～5月（地域性ニシン）、地域性ニシンは北海道沿岸域や汽水湖沼域で産卵  
食性： カイアシ類、端脚類、オキアミ類、魚類（卵・仔稚魚を含む）  
捕食者： 大型魚類、頭足類、海産哺乳類

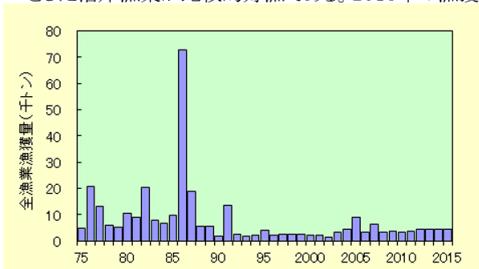


## 漁業の特徴

漁獲は沿岸漁業と沖合底びき網漁業(沖底)による。沿岸漁業では、日本海やオホーツク海の沿岸域、北海道東部の汽水湖沼内およびその周辺海域において、10～翌年5月に刺網や小型定置網により漁獲される。沖底では、日本海で10～翌年6月に、オホーツク海で周年に亘り、太平洋で9～翌年3月に漁獲される。太平洋における沖底の漁獲量は少ない。漁法や漁期、水域により産卵群、索餌群もしくは越冬群など、漁獲の対象は異なる。

## 漁獲の動向

19世紀末～20世紀初頭には北海道・サハリン系群が大規模な資源を形成し、年間40万トン以上の漁獲量が記録された。しかし、同系群は20世紀中頃に減衰して以降、豊度が高まった場合に我が国沿岸へ来遊し、一時的に漁獲量が増加することはあるものの、漁獲量は年間1万トンを下回ることがほとんどである。近年は、主に地域性ニシンを対象とした沿岸漁業が比較的好漁である。2015年の漁獲量は4,598トンであった。

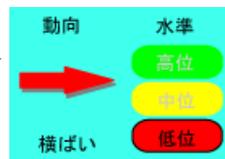
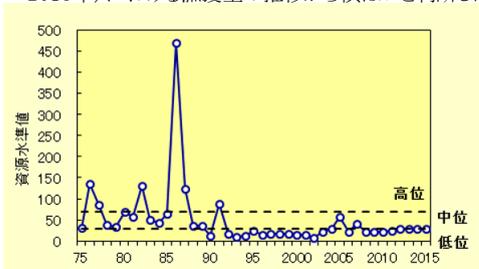


## 資源評価法

北海道・サハリン系群は20世紀中頃まで毎年のように豊漁をもたらしたが、近年は同系群によると考えられる漁獲量の増加は頻繁には起こらず、北海道周辺の資源は石狩湾系群および各地の湖沼性ニシンによって主に支えられている。このため、北海道・サハリン系群が減衰した後である1975年以降の漁獲量を基に資源評価を行った。

## 資源状態

資源水準は、1975～2015年の漁獲量を平均した値を50として各年の漁獲量を指標値(資源水準値)化し、70以上を高位、30以上70未満を中位、30未満を低位とした。2015年の資源水準は資源水準値が29.7であるため、低位と判断した。動向は、直近5年間(2011～2015年)における漁獲量の推移から横ばいと判断した。



## 管理方策

各地の地域性ニシンを持続的に利用していくことが重要である。地域性ニシンを漁獲対象とする沿岸漁業では、初回産卵個体を保護するために刺網の目が規制されている。北海道・サハリン系群を漁獲対象とする日本海およびオホーツク海における沖底では、漁獲物に占める体長22cm未満の個体が10%を超える割合で混入する場合には直ちに

操業を中止して漁場を変更するという制限が設けられている。資源増大に向けて卓越年級群を管理する上では、今後もこのような小型個体の保護は不可欠である。種苗放流は地域性ニシンの分布域において広く行われてきたが、産卵場・保育場となる沿岸域や汽水湖沼域の環境保全と並行して進める必要がある。

#### 資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 19世紀末～20世紀初頭に北海道周辺で大規模な資源を形成した北海道・サハリン系群が減衰して以降は、漁獲量は極めて低い水準で推移している
- 近年、北海道周辺においては主に各地の地域性ニシンが資源を形成しており、沿岸漁業は比較的好漁である

#### 管理方策のまとめ

- 北海道周辺各地の地域性ニシンを持続的に利用していくことが重要である
- 資源増大に向けて卓越年級群を適正に管理する上では、小型個体の保護が不可欠である
- 種苗放流は、産卵場・保育場となる沿岸域や汽水湖沼域の環境保全と並行して進める必要がある

執筆者：横田高士・千村昌之・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。